

野の仏ギャラリー ⑱

虚空蔵菩薩立像

南多久町龍照寺

隅丸長方形の光背と立像が一体化した小像で、蓮華台はありません。頭髮を丸く高く結び上げ、頭部に円文などを有する宝冠を載せています。顔の表情は穏やかです。右手に剣を握り、左手の上に宝珠を載せています。天衣が頭部から両腕まで垂れています。虚空蔵菩薩とは、知恵と慈悲を、虚空(大空や宇宙)のように無限に蔵した菩薩という意味です。



多久市郷土資料館長 藤井伸幸

○菩薩は本来悟りを開く前の修行中の者を称します。

○剣は知恵を象徴するとされます。

○宝珠は願いをかなえる不可思議な玉です。

○天衣はシヨール状の衣です。

今月の論語

性相近きなり

習相遠きなり

生まれつきは誰でもお互い似たようなものであるが、習慣や育ち方によって人間がすっかり変わってくる。

今月の福宅放送は、東原岸舎西溪校9年の柴田華蓮さんです

教育長コラム

ちよっとい話



忘れられない写真

東日本大震災後の瓦礫の中で撮られた写真にくぎ付けになった。7歳から8歳位の男の子が、両手に力を込めて強く握りしめ、全身を固まらせ、こっちをじっとらみつめている。

写真手前では何かが焼かれているのだろう、大きな煙が横に流れている。その子を守るように片手を背中にし、もう片方の手で自分の涙をぬぐっているおばあさん。子どもと同じ煙の中の一点を見つめ、泣き崩れている。しかし、子どもは泣いていない。煙の一点をにらみつけたまま。

茶毘に付されているのはこの子の親であろう。火葬する場所もなく、目の前で茶毘に付される親の姿を見なくてはならなかった。

あの子にも9年半が過ぎた。思いつきり泣けたらどうか。

日本は、あの子を守れているだろうか。私たちの願いや優しさは、あの子に届いているだろうか。

教育長 田原優子

市民文芸

◆ 秋くればわが家の高き柿の木に登りて落ちた従兄弟なつかし
浦野 嘉恵

◆ はかな事 打ち重なりてこの秋は 風にいたみし萩僅か咲く
川浪 信子

◆ 繕いをする時だけがひとりじめ 幼い頃の母との思い出
梶原恵美子

◆ 悲しみを抱きしめた時新しい 世界の扉が開くと思う
野崎 隆幸

◆ 生きて来し長き思わす不用品を 捨てきらず居る何にこだわる
尾形 節子

◆ 賽銭の音のころんと秋彼岸 中嶋 清子

◆ 野分来る 心音強く打ちにけり 富樫 明美

◆ 台風の子報聞きつつ握り飯 本村 則子

◆ 蝸や波音高き七ツ釜 おおやはな 武富 律子

◆ 靴底の減り方で知る健康度 大谷 和

◆ 高価なドレス試着だけして店を出る 田代まつこ

◆ ライバルの鼻の高さが気にかかると 高塚ちかこ

◆ ママの弁当子供が主役 パンおまけ 田中正春

◆ 病得て知る健康の有難さ 松下 修

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

俳句 《互選》

川柳 《多久川柳会互選》